松浦郡の人、寛永七年の秋、我國をさりて安浦にゆきて、其父に去たがひ、永暦の天子の時、思明州に鎮して延平王に封ぜられ、國姓爺といはれしはこれ也、其後寛文元年塔伽沙古の地を併せて東寧國とあらたむ、すなはち今の臺灣これなり、

〔長崎夜話草 三〕塔伽沙谷之事 幷 國姓爺物語

塔伽沙谷は、唐土東南の海中に在島國にて、本は國主もなく、○略中 いつの比よりか紅毛人住居して、平戸へ渡海の便りとす、則名を臺灣と改め、城塹を築て住居せり、去かるに寛文元辛丑の年、國姓爺福州泉州の軍援兵なふして利を失ひ、臺灣に責入、紅毛を追落し、城塹を押取て住居とす、是より紅毛は咬留吧に落行て住居す、されば此國姓爺は、父を名は鄭芝龍と云、一官老と稱して、福州の者なりしが、明朝變亂の時に及んで、海島の賊船をかたらひ、韃靼に不屬して吳三桂に通路し、海邊の所々徒黨多しといへ共、味方士卒少きゆへ、急に福建道を討したがへる事あたはず、海島にかくれ居て、時を待て謀略をめぐらし、又は商船に乘て數々日本の五島、平戸、長崎の間に往來して年を經たり、其比平戸に妻ありて、男子一人產り、又長崎にも妾ありて、男子一人あり、其身はさば〳〵福州へ渡海して、軍旅怠る事なく、屬徒漸く多勢に成て、終に泉州漳州を責取、福建道を治め、福州城を築て居城とし、勢ひ漸く盛にして、十五省を幷呑せり、此時に到りて平戸なる妻子をむかふ、其船長崎に入津し、此旨關東へ注進ありて、公けの旨により、平戸の男子十七歳なりしを長崎に送られ、長崎より歸帆す、其母は此時に行ず、後に又行しとかや、此男子後に鄭成功といひ、國姓爺と號せしは是なり、又五島一官といふ者あり、芝龍が舊友にして五島に住居し、領主の寵愛に依て年を送りぬ、其一男子を鄭成功平戸に留め置て友とす、既に鄭成功日本の御免を得て、福州に到るに臨て、五島一官が子を偽ひ往んことをねがひ訟ふ、公けも御憐愍ありて、其心に任すべしとの御事にて、一官が子鄭成功と同じく出船す、則福州城内に入て、鄭成功と一所に